

被災地で活躍するモバイルファーマシー

巨大災害で避難所にたくさんの方が逃げ込んできたと思います。

避難者の多くが直面するのが「お薬」の問題です。もちろん、何日か分を避難の時に持ち出せたとしても、薬はすぐに使い切ってしまう。

病院や薬局も被災して「診療できない」「お薬を出せない」ことも。

薬が手放せない患者は、最悪、震災関連死に至ることさえあります。



そうした時に、薬の調剤室を設置した車で避難所に駆けつけて、その場で薬を提供する「モバイルファーマシー」という車があります。薬剤師が同乗し、調剤と「お薬」の相談にのります。

車の中で調剤します



東日本大震災から 能登半島地震へ

モバイルファーマシーをはじめ導入したのは宮城県。薬剤師たちが私たちも「東日本大震災のような巨大災害の時に何か役に立ちたい」との思いが結実したものでした。上の写真が宮城県薬剤師

移動薬局車

会のモバイルファーマシーです。

以来各地で導入が進み、能登半島地震でも、モバイルファーマシーが全国から、薬剤師とともに被災地に駆け付けました。

千島海溝沿いの 巨大地震・津波にも

もちろん、モバイルファーマシーも万能ではありません。道路が寸断されれば、それ以上先には行けませんし、1台の車で対応できる人数には、おのずと限界もあります。現在、北海道には札幌の民間薬局が保有するモバイルファーマシー1台があります。

全国では、薬剤師会などが配備を行ない、それに地元の自治体が補助金を交付している例があるようです。薬科大学等で保有しているところもあります。

千島海溝沿いの巨大地震は被災地が非常に広範囲です。札幌の1台では全く足りません。何らかの手立てを講じて、



災害対応医薬品供給車両

Mobile Pharmacy (MP)

宮城県薬剤師会

【MP開発の目的】
東日本大震災の知見から、宮城県薬剤師会では、ライフライン喪失下の被災地でも散剤・水剤を始め各種医薬品が供給(調剤)できる「災害対応医薬品供給車両」Mobile Pharmacy(モバイルファーマシー:以下MP)を企画・制作しました。

【MPの機能・主な装備】
※先行車のMP番号車 H25.12月より運用開始

- 排気量2,982ccの四輪駆動ディーゼルスターボ車で、劣悪な道路状況下でも運行可能
- 300~500品目の医薬品を積載可能 速やかに被災地に赴き、避難所等が整備されるまでの間 医薬品供給を担当し、避難所開設後は巡回診療チームが発行する災害時処方箋を調剤
- 医薬品の品質劣化を防ぐため車載用90℃DC冷蔵庫装備
- 携帯電話がダウンした状況下でも使用可能な短距離通信用デジタル無線機を搭載
- 大型バッテリー3台、外部AC電源、自家発電機、ソーラーパネルを採用、状況に対応した電源を確保
- 水剤の調剤用として生活用水とは別の専用のシンクと清水タンク(約40L)を設置
- 予備燃料携行タンク(発電機用)を搭載する専用保管スペースを確保
- 被災地への情報伝達ツールとして、地デジ、BS/CS110° アンテナおよび40型液晶TV搭載
- 自己完結型支援の為、生活設備一式(洗面台、トイレ、温水シャワー、ベット等)を完備
- 5,160×2,110×2,940(mm) 定員3名 普通免許での運転が可能

【MP搭載の調剤設備】

- 錠剤棚、水剤調剤台、散剤分包包機、電子天秤、外用調剤台、保冷庫、情報処理用コンピューター、その他調剤用品等

【MPの運用形態】
宮城県薬剤師会では、県医師会の編成するJ-MATチームのなかに薬剤師を含んだ編成を基本とする提案をしており、MPもJ-MATみやぎの一員としての活動を予定しています。災害時医薬品供給管理システムと一体的に運用することで、被災地での円滑な医薬品供給を実現するとともに、調剤履歴を記録し、継続的な診療を支援します。
令和元年台風19号に伴う災害時、宮城県伊具郡丸森町において活動し、災害処方箋に基づき支援しました。(災害処方箋 162枚対応/10/18~10/27)